＜炉物理・核データ部会合同企画セッション報告＞

パネルディスカッション「核データ・炉物理研究は、社会にいかに係るべきか」
－はじめに－

原子力安全委員会事務局　佐治悦郎(座長)

何らかの形で原子力に関係する記事が新聞に載らない日はない、といっても過言ではない。それほどに原子力と社会の係わりは深い。そうした状況下で、社会への発信母体としての原子力学会の役割が日々、その重みを増してきている。核データ部会、炉物理部会にとってもそれは他人事ではないはずである。

こういった文脈で今回のパネルディスカッション[註]のタイトルである「核データ・炉物理研究は、社会にいかに係わるべきか」というテーマが関係者に違和感なく受け入れられたかどうかは定かではないが、開催当日、会場は満員となりその関心の高さをうかがわせた。しかし一方では、このテーマは受け手によってさまざまに異なった問題意識を喚起するということが、パネラーの方々の提案内容にはっきりと見て取れた。各々の置かれた立場や環境が反映され、さらにパネラーの個性も加味されて、それぞれに興味深い、そして少々、司会者泣かせと言いたくなるような、広範な内容の提案をいただくこととなった。以下、各パネラーの方々より、当日の講演・提案の概要を紹介いただく。

[註]（編集委員）

核データ部会と炉物理部会の合同企画セッションとして、日本原子力学会「2003年秋の大会（静岡大学）」において、パネルディスカッション「核データ・炉物理研究は、社会にいかに係わるべきか」が開催された。

座長：佐治 悦郎（原子力安全委員会事務局）

パネラー：

坂井 浩二（四国電力(株)）

丸山 博見（(株)ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ﾆｭｰｸﾘｱ･ﾌｭｴﾙ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ）

田原 義壽（三菱重工業(株)）

山本 章夫（名古屋大学）

山野 直樹（住友原子力工業(株)）

その後の経緯については、炉物理部会ニュースNo11(部会ホームページに掲載)をご参照されたい。

本報告は、日本原子力研究所 核データセンターが発行する「核データニュース No.77 (2004)」にも、同文で掲載される。